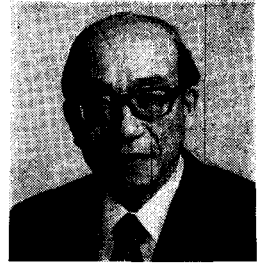


増えすぎた金魚

北海道電力株式会社 取締役社長 戸田 一夫



増えれば良いとは限らない

わが家の池に、1匹200円程度の安物の金魚を10尾ばかり放して、7～8年にもなろうか。池に入れたままの越冬は無理である。11月の末には家の中の古い風呂桶に入れ、4月の末に池に戻していたが、風呂桶ではお日様の光も少なく、環境も良くないはずなのに、3尾は減ったものの丈夫に育ち、3冬を過ぎたある夏の日、家内が小さなものが池の中で動くと言う。2人でジッと目を凝らしていたら、長さ2～3センチの子鮎に似た魚が群れをなして泳いでいた。日が経つにつれ、赤、黒、白の斑になった小魚に変色し、その年の11月末、数えてみたら81尾の稚魚が生まれていた。

本来、何の価値もないはずの金魚であっても、私ども夫婦にとっては宝物。現金なもので、60ℓ程度の水槽をわざわざ買って、稚魚を入れ、水草もたくさん添えて眺めることとした。ペット屋さんの勧めで簡単なフィルターを二隅につけ、子鮎が金魚が変わっていく様を夫婦でああでもない、こうでもない、楽しんだのである。水温も22度くらいで室温とバランス。真に快適な環境のはずであったが世の中そうは問屋が卸さない。

だんだん大きくなるにつれ水が汚れ、汚濁した中で金魚の影が動いているという状態になった。ペット屋さんに相談したら、フィルターの能力が足りないと言う。大きなフィルターを着け、かなり良くなったが、2週間程度しか持たない。水槽を3倍の大きさのものに取り替えたが、金魚の方も大きくなり、その大きさに応じて排泄物も多くなる。水が澄み、金魚の泳ぎを鑑賞できるのは10日程度が限度である。その上、数が多い故か、せ

っかくの水草を食べてしまい、見る影もない。近所へ金魚を配って数を減らしたが、毎年、10尾、20尾と生まれるから、現在でも、全部で90尾がわが家で暮らしている。今、400ℓの水槽で70尾、180ℓの水槽で20尾ばかりが泳いでいる。フィルターや水槽の清掃と水替えを怠け、汚れが始まると、急速に水は濁り、わずか3～4日で、金魚の姿は茶色のペール越しに映るだけとなり、霧の中の人の姿を見るような景色となる。

この金魚との付き合いの中で、閉じられた空間の大きさと、その中で生きる生物の数のバランスを教えられたのである。理屈としては、頭の中でわかっているようでも、空間の持つ能力はわれわれが考えているものよりも小さいようである。そのことをかなり強く教えられたと思う。

エネルギーと大気汚染

昭和52年、原子力を担当することとなり、まず脳裏に浮かんだのは、当社が原子力発電所を作る理由は何か、この北海道で原子力発電が果たす役割は何か、自分なりに信念を持つ必要があるということだった。当時、米国では、どちらかと言えば反原子力のカーター大統領の時代で、「原子力の諸問題と選択」と題するマイターレポートが出され、経済的には原子力発電と石炭火力発電では大差がないこと、核拡散防止のためには再処理を中止すべきだと訴えていた。昭和54年には、TMI事故が発生し、日本国内の原子力発電に対する批判も強まっていった。

一方、在米火力と大気汚染の関係は、SO_x、

NOx をめぐる環境問題がすでに大きな社会問題となっており、当社は伊達火力の建設が環境権訴訟の対象となっていた。しかし私は SOx, NOx, を削減する手段は技術的に可能であると考えていた。

炭酸ガスが、将来、大きな問題になるかも知れないと最初に考えたのは、今から約20年前、1972年、雑誌サイエンス10月号に、山本義一先生が書かれた「大気汚染と環境の変化」を読んだ時である。それ以来、炭酸ガスと気象関係の資料に強い関心を持つようになった。炭酸ガス問題は地球にとって慢性的な性格の影響を与え、解決が非常に難しいのではと、思っていたからである。1982年 IIASA レポート ENERGY IN A FINITE WORLD の中で従来通りの化石燃料に頼るエネルギー供給を続けた場合、2050年には大気温度が4℃上昇するとの記事を読み、いずれこの問題は大きく取り上げられるとの危惧の念を持ったことを覚えている。翌年、ペンギンブックの FUTURE WEATHER の中で、炭酸ガスによる地球の温度上昇を科学的にモデル計算した結果を読み、これがいわゆる学術書ではないだけに、社会的に大きな問題となるのは近いと思ったのである。そうした点からも、原子力の推進は北海道の将来にとり必要であると考えていた。3年前までは、炭酸ガスが地球温暖化の原因であるとの新聞報道はほとんど見られなかった。最近は、かなりの頻度で報道されるようになってきたが、むしろ遅かったと言うべきであろう。

われわれは地球という大きな容器の中で生きている。大気を宇宙と入れ換えて清浄化できれば良いがそれは不可能である。水を入れ放し、フィルターも取替えない状態のわが家の金魚の水槽と異なるところはない。そうだとすれば、地球の大気は、地球上の生物の排泄物と環境浄化のバランスが崩れた場合、急速に悪化していくと考えなければならない。この対応策は、排泄量と環境浄化能力をバランスさせれば良いことは誰にでもすぐわ

かる。

この排泄量を減らすには、金魚の場合、食べさせる餌の量を減らすか、水槽の中の金魚の数を減らせば良い。人間の社会ではこの2つとも簡単ではない。

金魚の囁やき

北海道で消費する化石燃料から発生する炭酸ガスを、 -80°C で固化して200ℓのドラム缶に詰めたとすると、道民1人当たり1年に31本程度になる。これを自宅に積むとしたら、4人家族30坪の家では略6年程度で人の住むところはなくなるはずである。もちろん、地球上の植物が吸収してくれるので、この計算のようにはないが、その肝心の植物も大幅に減っていると聞けば、いったいどうなるのか、これまた心配である。原子力発電所から出る放射性廃棄物の量が批判的となっているが、当社泊発電所2基の運転から生ずる量は、道民1人当たり1年間に低レベル廃棄物が5ccで、お猪口1杯くらい、高レベル廃棄物が少し大きめの豆粒1つであることを知ってほしいのである。

環境問題を考える場合大切なことは、汚染原因が環境に与える影響の性格を把握するとともに、量をできるだけ正確に調べることである。そして、量の問題は人間の生活態度そのものに帰着することも知らねばならない。ゴミ戦争という言葉が聞かれ、銀座のカラスが糖尿病との話を耳にすれば、ことの真偽よりも、われわれの豊かさの追求が、正しい方向なのか、疑問に思えてくる。

世界人口が50億を越え、現在もなお急増しているという。金魚の数を減らすことはたやすいが、人は簡単に減らせない。「人間の生命ほど大切なものはない」「2人のために世界はあるの」と言いながら、自然が作った本来の生命の在り方を変えて行きつつあるこの社会の利己性、これは正しく荀子の言う「人の性は悪」でなくて何であろうか、と金魚が大きな口を開けて私に囁いた。